

『国語学大辞典』の改訂

会長 野村雅昭

(2006年4月～2009年3月在任)

理事会では、今期の重点目標の一つとして、学会が主体となって刊行した出版物の検討を行いました。そのうち『国語学大辞典』(1980年、東京堂出版刊)については、改訂あるいは改版を行うことが必要だとの結論に達し、2007年5月の評議員会で承認されました。『国語学大辞典』(以下『大辞典』)の改訂は学会創設七十周年(2014年)の記念事業として位置づけられ、2013年の出版を目指し、2008年度から大辞典改訂編集委員会が設けられました。同編集委員会の活動についてはお知らせの機会がありませんでしたが、ほぼ1年が経過した現在、ある程度まとまった事柄もありますので、あらましをご報告することにします。

近年、各研究領域で専門事典の出版・企画が相次いでいます。さらに日本語学全般にかかわる研究事典の改版や「日本語学」を書名に含む大事典の出版が伝えられています。学問の分化が著しい現在、専門事典の刊行は、時宜に適したものとして理解できます。それらの中には本辞典の改訂と重なるところの大きいものもあることでしょう。

それにもかかわらず、学会が独自に『大辞典』の改訂を行うのは、「日本語学」の名を冠する唯一の学会が日本語学という研究領域がどのようなものであるかということ和社会に対して自ら明らかにし、責任を持って実行する企画として格好のものであると考えるからです。具体的には、次のような視点を含むことを目指します。

ア.1980年の刊行以来、30年近くが経過した。学問・研究の進歩という点で、この年数のもつ意味は小さくない。仮に『国語学大辞典』の名称を変えないとしても、改訂は必要である。この間に、われわれの学会は名称を変えた。「国語学」が「日本語学」になったのは、単なる便宜ではなく、研究活動が従来の名称では覆いきれなくなったからでもある。

イ.「国語学」と「日本語学」という用語の違いは、必ずしも学界の外で理解されていない。その違いを、研究領域、研究方法などの面から、利用者が明確に理解できる構成・内容になるようにしたい。

ウ.日本語に関心をもつ層がこの間に拡大した。関連領域と見られるものの範囲が飛躍的に増加している。日本語教育、日本語情報処理をはじめとする、それらの分野を包括し、視野に収めることが要請される。

エ.近年の日本語研究を巡る動向の一つに、日本語を母語としない研究者の数の飛躍的な増加がある。これは対照研究の発展を促し、日本語への視点を豊かにすることにもなった。それに続く研究者の育成にも目配りをする必要がある。

このような視点から、『大辞典』の見出し語1200語強を、16の領域に分け、現在におけ

る必要性からふるいにかけてきました。また、追加すべき項目を補いました。その結果、現在は900語程度が候補となっています。改訂といいながら、語数が減るのは意外な感じがしますが、これには理由があります。

『大辞典』の特徴は、その前身の『国語学辞典』（1955年、東京堂出版刊、2270語）を、中項目主義に改めたことです。今回の改訂は、その特徴をさらに徹底しようとしています。上記の基本的な観点である、学問領域としての日本語学の特徴を明確にしようとする結果のあらわれでもあります。関連する項目は単独で掲げるのではなく、一つの項目にまとめて収めようとした結果と言えるでしょう。

現行の『大辞典』の見出し項目のうち3分の2近くは、削除されます（表面上は見えなくなります）。現行版にある見出し語の数と、改訂版で新たに加えられる見出し語の数とは、ほぼ同じです。また、一般的な事項とそれ以外の書名・人名を合わせた項目数との比は、現行版ではほぼ2対1ですが、改訂版では3対1に近づいています。例えば、書名などでも、単独に見出しとなるものは少なくなり、「○○資料」のような掲げ方が多くなっていることを意味します。

まだ見出し語数が正確になっていないのは、見出し語の区分が確定していないためです。現在それぞれの見出しについて、現行版の見出しと同じものであっても、現在のものをそのまま転載できるか、一部加筆で掲載できるか、新規に書き直したほうがよいかなどの検討を、どのような執筆者に依頼するかの検討と合わせて行っています。これは新規に立項する見出しでも同じことで、現行版との関係を基本から考え直しています。

このようなことの結果として、新しい版は単なる改訂ではなく、むしろ改版といってもよいでしょう。したがって、現行版の見出しが改訂版にも残るとしても、必ずしも現行版の執筆者に加筆をお願いするとは限りません。学会として、これまでに形成したいわば知的財産を継承していくことは重要ですが、それに安んずることはつつしむべきだと思っています。

改訂される『大辞典』の書名は、近く決定する予定です。内容ともども学会の名称が国語学会から日本語学会になったことを象徴するものにすることが条件です。そのほか体裁にかかわることですが、横組みにすることが決まりました。また、見出し語に英訳を付することも、その方向で検討しています。

5月末で理事が改選されるのに合わせ、編集委員会でも、これまでの立項作業に区切りをつけ、新執行部のもとで、執筆依頼をしたいと考えています。皆さんのお力添えを心からお願いする次第です。

（『日本語の研究』第5巻第2号（2009年4月1日刊）所掲「理事会から」より）